

リレー随想 出版100周年 シニアこそ読もう『赤毛のアン』

12号棟 707室 清水 武

「エッ！ いい年をしたオジサンが少女物語の舞台へ？」——シルバー人材センターで駅前の自転車整理の仕事をしている私に、周囲はこんな言葉を投げかけてきました。私自身も最初はちょっとした気恥ずかしさもあったのですが、それは今をときめく脳科学者・茂木健一郎氏のアン番組出演で消え去ったのです。



本年3月、『赤毛のアン』出版100周年記念のNHK特集番組で氏が言ったのです。「若い時からアンファンだった。でも、男でからかわれるので、自分は隠して読んでいた」「古典は何度読んでも新しい発見がある」と。自信をもって取材準備を始めました。

6月半ば、カナダのプリンスエドワード島に飛びました。グリーンゲブブルズのりんごの花がちょうど満開。ハウスには世界各国からの見学者が押しかけていました。日本からも大勢の若い女性と中年の婦人。本場でのミュージカルも鑑賞しました。ガラ公演に先立って、全キャストが揃ってのサイン会と記者会見が行われました。私は日本での“アンブーム”を伝えた後、主役のアン、準主役のマッシューにインタビュー。

アン (アミー・ワリス) :「記念すべき年の主役をいただき光栄です。おしゃべりでチャームングで勇気もある。どこまでも希望を失わないアンは、私たちの“生き方の鏡”です」

マッシュー (サンディ・ウィンスビー) :「高齢になるにつれて、身体だけでなく心まで枯れてしまう人も多い。歳を取るほどにアンのような『心のみずみずしさ』が必要だと訴えたい」

アンがマッシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、育てる二人は年老いていく人生の無常。マッシューが亡くなり、アンが大学進学を断念、マリラを支え、再び自分の道を切り開いていこうとする最終幕は、観客の誰もが涙を誘われ、感動を禁じえません。

旅の途中、車椅子の日本婦人に会いました。Kさん。宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへ。60歳の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪く、娘の一人が付き添って人生で初めての海外旅行でした。



「アンは40年前に読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。プリンスエドワード島は美しく心が洗われる思いです。空気も澄み、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアン生き方は、ずっと自分の支えでした」

夢を抱き努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの例のような気がします。マッシューの言うとおりに、歳を重ねるにつれて夢を失い、身体だけでなく、心まで枯れてしまう人も多い。歳をとるほどにアンのような心のみずみずしさを！シニアになって読む、または読み直すところに、心の若返り、ときめきもあると実感しているところです。

(写真とレポートはHPで紹介しています。URLは <http://homepage2.nifty.com/donky/> です)